

令和8年度第3次 連合教職大学院 入学試験問題

[高度教職開発専攻]

小論文

注 意

1. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで開かないこと。
2. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。
3. この問題冊子は、表紙を除いて2枚である。もし不備の場合は、直ちに申し出ること。
4. 解答用紙は1枚である。所定欄に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。
5. 下書用紙は、1枚である。
6. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

問 次の文章を読み、著者の主張について簡潔にまとめなさい。それを踏まえ、著者の主張に対するあなたの考えを述べなさい。(横書き 八〇〇字以内)

手伝いをしていっているうちに、いろいろな経験をする。なかでも失敗したりするのはもっとも有効な体験である。

なにもすることがないと、こどもは、台所の母親のそばにまつわりつく。包丁で野菜の皮をむくのが、見ていておもしろい。「やらせてー」といって、じゃが芋の皮をむこうとすると、手がすべって指を傷つけそうになる。なんでもないように皮をむく大人は、えらい、と感心する。何度か失敗しないでも、リンゴや柿の皮をむくことができるようになる。うまくできたときの快感は格別で、自分が大きくなったような気持になる。

いまの家庭はこどもの勉強を大事にする、というより、成績を気にする。学校へ通っている以上、勉強が第一、ほかのことはなるべくさせない。家事の手伝いなどさせて、成績がさがったらどうする、などと思ったりする。

勉強さえしていればいい。ほかのことはしないでもいい。極端にそう考える家庭が多い。

さぞかし、勉強がよくできるだろうと考えるが、その実、それほどのことではない。

むしろ勉強の時間のすくない方がよくできる、ということもある。

アメリカの大学生のことだが、家庭からたつぷり学費、生活費を送ってもらっている人たちよりも、アルバイトなどで自活している学生の方が、成績のよいケースが少なくないという。

家の手伝いは、勉強の妨げになることはまずない。むしろ、いい効果をもたらす方が多いであろう。進学が大問題になってから成人した人たちは、点とり競争におおられて、勉強に目の色をかえた。親たちも、うちの勉強では安心できなくて、塾へ通わせることが多くなった。こどもは、学校から、まっすぐ塾へいくというようなのが珍しくなくなった。「ウチの手伝いなんか、させられるものですか」と親たちは思っている。

学校には「生活」がない。学習ばかり、わずかに昼の給食があつて生活をすこし味わうが、あとは、生活を停止して、学習ばかりである。

これがどんなに不自然なことか、教育の普及したいまの人たちにはよくわからないのである。勉強さえしていればいい子だと考える。こどもに生活などいるものかと思っている人もある。長い間、学校教育を受けていると、だんだん、生活のないのが、人間の発育に大きな害を及ぼすことがわからなくなってしまう。

学歴は申し分がない。社会的にも有能であるが、どこか人間らしさに欠けている。生活のない勉強一点張りの人生を送ることの反省はすくない。

人間を人間らしく、豊かな心を持ち、大きな仕事をなしとげるには、どうしても生活力が必要で、その生活力は、本だけ読んでいては、身につくものではない。

学校の勉強は、ほとんど目だけを使う。すこしは、手を動かすこともあるが、じっと坐っていて、動かない。それでは、ほかのところは遊んでいる。

生活には、動くところはすべてはたらかせる。

実際に生活欠乏症を治すのは容易ではない。点とり競争も楽ではないが、人間として成長するのに欠かせない生活力を身につけるのはたいへん難しい。

生活の乏しい学校が、昔から、修学旅行をしたのはおもしろい。なんの役にも立たない観光旅行の一種である。友だちといっしょに一夜をすごすということはつよい印象を与える。一生の思い出になる。効果は小さくない。そうかといって、何度も修学旅行をしているわけにはいかない。

家庭の手伝いは、生活教育として価値をもっているが、問題も生じつつある。

家庭にも生活がすくなくなってきたのである。高学歴の人ほど生活をバカにする傾向があり、そういう人が家庭をつくると、生活の度合いがうすくなる。仕事は大切にしているが、生活はかえりみないのを新しいように錯覚する。

そういう家庭では、子どもが手伝おうにも家事そのものがない、ということになる。

手伝いなど古臭い、と考えるのはやはり偏見である。

(出典) 外山滋比古 『家庭という学校』(ちくま新書、二〇一六) 一部改変